食籠

驗あらん僧たち、祈りこゝろみられよなどいひしろひて、うづみつる木のもとにむきて、數珠おしすり、印こと〳〵しくむすび出などして、いらなくふるまひて、木葉をかきのけたれど、つやつや物も見えず、所のたがひたるにやとて、ほらぬ所もなく、山をあされどもなかりけり、うづみけるを人の見をきて、御所へまいりたるまに、ぬすめるなりけり、法師どもことのはなくて、きゝにくゝいさかひ、はらたちて歸りにけり、あまりに興あらんとする事は、必あひなき物なり、

〔看聞日記〕正長二年〇永享元年八月廿八日、今日室町殿〇足利義教鎧着初、管領出仕初、則評定初云々、自内裏風流破子三重被下、太平樂三重、鞨鼓二重、洲濱形二重、先日仙洞舞御覽破子也、殊勝驚目、握翫無極、

永享五年二月廿五日、抑自室町殿島破子富士長柄橋、古今序心、賜之爲悅、晩景有連歌、聖廟法樂也、

〔下學集下器財〕食籠シキロウ

〔倭訓栞中編志十〕ゑきろう　常に食籠とかけり、武備志日本考に食籠あり、

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕食盒　合子　俗云食籠〇略中

按盒俗云食籠也、小者以爲香盒、大小不一、描金繪堆朱青貝等數品、

〔嬉遊笑覽二下器用〕食籠は東山殿御飾記、君臺觀座右帳、仙傳抄に、棚にかざれる圖あり、重に作りたるもの多し、又私の贈り物はこれを用、宗碩の佐野渡に、此ふたりの方より食籠などいふもの、とりどりにてこまゞ〳〵と書おくり侍る、

〔大内問答〕一御食籠押物供饗の物も參候哉の事

式々の御參會に、左樣の物は不參候、自然亂酒に成候而、左も候半か、食籠は殿中へは參らず候、

〔三内口決〕一折敷食籠等之事

食籠は内々之物候、然者是モ爲押物之代出座敷候事、於當時者理運事候、頗催座之興候條、尤之儀候、